



○開会宣告

○協議事項

(1) 生駒市におけるいじめ対策について

① 生駒市のおじめの現状と課題について 【資料1】【参考資料1】【参考資料2】

- ・生駒市のおじめの現状と課題について、吉川教育指導課長から説明
- ・小中学校のおじめの現状と課題及び取組について、あすか野小学校、永島校長、小林教諭、光明中学校、阪本校長、大西教諭から説明

永島校長：まず小学校全体のおじめの状況について説明する。

おじめの背景として、子どもの生活環境もあり、学校によって特徴が出ている。

おじめは低年齢化している。1・2年生のおじめは友達同士のトラブルで、いつも同じ子から何かされるのはおじめではないのかという相談が上がってくる。中学年では、低学年からの関係を引きずったおじめの相談があり、ものかくしやこそこそ話などが出てくる。高学年では、学校のみならず塾が絡んでくる。塾では他の学校の児童とのつながりもあり、成績順に並べられることなども関係して、バカにするということが出てくる。特に、中学受験などの進学を考えている地域になるとそういうおじめが出てくる。

まずは教師の目を持って取組むことが大事。おじめは教師や親の目の届かないところで起こって、後で初めてわかる。子どもや保護者と面談し、事実確認し、双方から話を聞いて解決に努めている。また、学級・学年集会等で個々の名前を出すことなく事案を挙げて指導している。おじめは、早期発見・早期対応が最低条件であり、担任だけでなく、組織としておじめに取り組んでいく必要がある。本市で深刻な事案が生じていないのは先生方の取組の成果であると思う。

保護者の要求に対応できないものもある。どのように対応したかを文書で示してほしいという保護者もいる。過去のことを持ち出されることもある。それだけお子さんのことを真剣に考えているということであるが、学校がどこまで対応できるかが難しい。

最後に、おじめの要因の調査をしていかなければならないと考えている。現代社会において、子どももストレス社会に置かれており、その影響を受けている。例えば、塾に行きたくないのに行かされているというストレスの発散がおじめに発展することもあると感じている。

小林教諭：あすか野小学校の現状と取組について説明する。

あすか野小学校は、学研都市線ができ、白庭台の新興住宅地ができて以来、児童数が急激に増加しており、現在は全児童数が960名を超えて

いる。新たに転入した若い保護者が多く、保護者同士のつながりも浅い部分がある。また、卒業後に進学する上中学校は県内でも学力が高いと言われているため、それに合わせて学力向上に関心が高く、低学年から塾に通っている児童が多い。その分友達同士で関わる時間が限られるため、友達のつながりが薄くなっている。

あすか野小学校のいじめ認知件数は50件である。小学校では、子ども自身がいじめであると言えば学校もいじめとして捉えるので件数は多いが、ちょっとした意見の食い違いが解決されずにやりあっていることがいじめにつながっていくものが多い。これも人間関係の希薄さが要因の一つかと考える。保護者も共働きの家庭が多く、子どもとの時間を確保できず、また他の保護者と話もできないので、家庭で子ども同士の問題を解決できないために学校で対応することが多くなっている。特に中学年でいじめが多く、低学年から引きずっている事案も多いが、大人が間に入るとその場で解決できるものがほとんどである。

また、人間関係をいかに構築するかが課題である。「毎日笑顔で輪になって輝く学校」をスローガンに、新入生と6年生の集団登校や、縦割り活動で朝の時間に一緒に遊んだりして輪を作っている。また、生徒指導部では挨拶活動を行っている。他にも廊下の右側歩行の呼び掛けや、6年生は身近でできる平和宣言を行っている。

阪本校長：中学校でのいじめの内容としては、ひやかしやからかいが一番多い。テレビなどで人をバカにしたりする様子を真似しているようである。また、後先考えずに楽しいことや嬉しいことを優先してしまい、後からしてはいけなかったと気付くこともある。

未然防止となると、社会性・人権感覚や規範意識をどう身に付けるかが大きな問題になる。学校だけでなく、家庭での人格形成も重要である。また、保幼小中の教育をどうつなげるか。子ども達には、知識的には理解しているが行動として伴わない部分がある。規範意識や人権意識が身に付けられれば、いじめ防止につながると思う。

いじめの早期発見・早期対応には教師の関わりが大事である。教師自身が鋭い感性を身に付けなければならない。生徒と向き合う中で、思いを伝えやすい環境づくりも課題である。さらに、事案に対応する際には、教諭が一人で抱え込むのではなく、学校全体で共有しながら対応したい。また、家庭でも幼い時から規範意識や人権感覚を身に付けるよう話をしないと、甘やかしや溺愛が子どもの好き勝手な行動につながるようになる。

ネットの問題として、知識としては身につけているが、聞いたり見たりしたことを安易にネット上に流してしまったりすることもあり、どのように制していくかは家庭での見守りも必要であり、家庭と学校が協力し

ながら対応することが必要である。

大西教諭：光明中学校の校区は、複数の小学校の校区にまたがらないので、子ども同士の関係性において他の中学校と異なる部分もあるかと思うが、本校のいじめの現状と課題について説明させていただく。

子ども達は「いじめはいけない」という意識を持っているが実際にいじめは起こっている。いじているのではなく、いじているという認識のようである。仲のいい関係の中で起こっていることが、一方はいじめと感じていることもある。また、1年生などで関係性が上手くいっていないことからいじめにつながる場合もある。昔のようにいじめっ子がいるのではなく、親しい間柄の中でいじめが起こっている。

先ほど説明したように、光明中学校では、1つの校区から進学しているため、2・3校が集まっての勢力図などはないが、幼稚園からの知り合いもいるので、いじめという言葉を使って保護者に伝えるのに慎重を要する。

1対1のいじめは個としての関係性の問題として個別指導するが、同じ生徒の名前が何度も出てくると全体との関係性として、集団がどうなっているかの集団指導を行う。

いじめが起きてからだと後手になるので、本校では、命の大切さを考える月間として講演に来ていただいたり、教育相談活動として機会を設けて一人一人の話を聞いたりしている。また、命を守る憲章をつくり未然防止に努めている。

いじめには起きやすい環境と起きにくい環境があり、落ち着かない環境下ではいじめが起きやすい。いじめ対策の直接的な取組だけでなく、学級活動や行事等を充実させる取組がいじめの防止につながる。

大人が思う以上に、子どもはコミュニティスキルに弱みを持っている。人との関わり方を身に付けるトレーニング活動として、県や市のカウンセラーに授業をしていただき、自分の思いを表現するトレーニングを行っている。また、教師個人の敏感な感覚も必要である。生徒との信頼関係がないと相談してもらえない。教師個人ではなく全体の体制が必要である。

(質疑)

山本委員：まず、いじめに関するアンケートの調査結果について、小学校と中学校のいじめ認知件数の差が大きすぎる。全国で見ると、小学校は中学校の3倍程度だが、生駒市は中学校26件に対し小学校は359件と10倍以上である。小学校と中学校で認知の基準や捉え方に差があるかと感じられるがどうなのか。

また、今回の調査では、いじめと認められないが経過観察の事案も件数

に入れているとのことであり、昨年の調査結果と比較できないが、数字のとおりいじめが増えているのか、それとも実際は横ばいと考えてよいか。

また、児童生徒自身がアンケートに回答したいじめの態様について、上位4件をピックアップしているが、これ以外にも例えば金品を取られるなどさまざまな態様がある。生駒市はこの4項目以外に特徴的に多いものがあるか。

吉川 課長：まず、小中の認知件数の開きについては、担任が聞き取りを行う段階で、小学校1, 349件、中学校68件について聞き取りを行ったため、最初の件数の違いが大きい。調査基準の変更により認知件数は増えたが、いじめの実態、本人への指導や保護者への謝罪等は昨年度と大きな変化はない。

また、態様については、これ以外に特徴的に多いものはない。一番多いのはひやかしである。3つ目以降になると金品や暴力など、より重い項目もあるが、生駒市として特に多いという認識は持っていない。4つ目のパソコンやスマートフォン等の情報機器を利用したいじめについては、件数は少ないが一番の課題と認識しているため表に記載させていただいた。

山本 委員：いじめが増えていないという見解には安心したが、調査基準が変わるとデータが有効に使えない。データの信頼性を高め、使えるように工夫してほしい。生駒市独自の調査は難しいと思うが、県や生徒指導の研究会で、実態把握について研究いただきたい。

小紫 市長：今後は同様の算定の方法を取るので、検証できるようになると思う。聞き取り調査の最初の入り口は自己申告か。中学校の生徒はプライドがあったり、信頼関係がないと言わなかったりするので、すべての事象を拾っているかどうかは課題として残る。

いじめの態様の上位4件を示していることについては、金品や暴力を書くのが良くないという意味での判断か。

吉川 課長：隠そうという意図はなく、件数が多いものを3つ挙げ、最後の1つは件数が少ないが注目すべきものとして挙げた。

小紫 市長：今の表記では誤解を招く恐れがある。「上位3項目と注目項目」と明記するなどをしてしなければならないと思う。

中田教育長：県の公表結果に合わせて作成している。いじめの実態は公表すべきと思うが、公表する質問項目を県と相談して整合性を持たせ、生駒市としてどこまで公表するかを教育委員会で議論しても良いと思う。

小紫 市長：県は関係なく、生駒市の資料として、関係者が見たときに正確なものが出せるようにした方が良い。

数字を公表するのは怖い。生駒市は細かく事案を拾っているという方針

で良いが、悪意的に見ると生駒市は県全体の認知件数の3分の1と見られる。教育以外の分野でも悪用する人がいる。市としては不当な解釈には反論していく覚悟で数字を公表する。

保護者や子どもたちのコミュニケーション能力が弱いことの裏返しでこの数字かと思うが、そのような説明を加えながらやっていきたい。

飯島委員：敏感に捉えている自治体は認知件数が多くなる。県と同じ捉え方ではいけない。調査結果にある解消率というのは、いじめの現象がなくなったのか、原因がなくなったのか。原因がなくなると解消したと言えない。現状が把握されるようになってきて原因を追究しようとする段階に入っている。自分たちはどの段階にいるのか、アピールできるよう工夫してほしい。

小紫市長：何をもって解決とするかという判断は、現場の感覚も難しい。

神澤委員：男女や各学年の違いで属性が分かる。また、過去1年間で起きたいじめとこれまでに起きたいじめを調べるのでも結果は変わる。調査の時に詳しく調べられるよう検討してほしい。

小紫市長：公表できる調査をしたい。県の整理は一つの整理として、生駒市として発表する時に性差や学年別など掘り下げたものを生かせないかのご意見はありがたい。

## ② 生駒市いじめ防止基本方針（案）について 【資料2】【資料3】【資料4】

・生駒市いじめ防止基本方針（案）概要について、吉川教育指導課長から説明（質疑）

飯島委員：学校教育の中で、先生自身が人権感覚や自尊意識を身に付けるための模範的なふるまいをしているか。何か意識していることがあれば伺いたい。

吉川課長：子ども達に指導するからには、先生がしっかりした言動をしなければならぬ。各校では、子ども達に対して人を傷つけることをしてはいけないと示していることと思う。

小林教諭：小学校では教師と子どもとの距離が近いので、いかに子どもに寄り添っているかが重要である。小学校に入ると、保護者より先生の方が長い時間一緒にいることになる。あすか野小学校では、教諭はできる限り休み時間もそばにいるし、毎週木曜にロング昼休みをつくり先生も一緒にクラス遊びをする場面もある。信頼できる大人と思われることが一番大事と考えている。

小紫市長：飯島委員は、挨拶などをしっかりすることなどにとどまらず、意識が伴っているかということを確認されているかと思う。

飯島委員：全国では、生徒と先生の距離を近づけるために名前を呼び捨てにしている学校や学級もある。人権感覚に敏感な学校では男女を呼び分けないところもある。しかし、距離だけを意識すると人権感覚に甘さが出る。先

生に呼び捨てにされるのが嫌だと思う子もおり、悩みをネットに書き込む場合もある。そのあたりをどうお考えか。

また、自尊感情を高めるという観点では、例えば答案の間違っているところに大きくバツ印を付けて自尊感情を傷つけるような指導が世の中にはある。

子どもにとって先生は圧倒的な力を持っていて、嫌とはいえない状況もある。教師として、どのような接し方を心掛けているか。

大西教諭：呼び名については、小学校と中学校で感覚が違うと思うが、ご指摘のような観点まで踏み込めていないというのが個人的な感想である。生徒との距離が近くなるという意味で下の名前で呼ぶ先生もいる。生徒への関わり方に差がないように気を付けているが、そのような消極的な考え方ではなく、積極的な対応を考える研修をしたいと感じた。

小紫市長：昔は呼び名について意識をしていなかったが、子どもも保護者も価値観が多様化する中で、現場でのご苦労があるかと思う。

小林教諭：小学校では、呼称の考え方は先生によって違い、それぞれに子どもと向き合うスタイルがあるのが正直なところである。私個人としては、休み時間は下の名前で呼び、授業中は「～さん、～くん」と呼んで区別を付けている。これは人権を意識してではなく、休み時間と授業時間を区別するという意味で差を付けている。

飯島委員：呼び捨てが良い、悪いという話ではない。今お話しいただいたような呼び分けなどの教育的配慮は子どもにも伝わる。場面に応じての配慮が子どもたちの身に付いていくものと感じる、有り難いご意見である。

レイノルズ委員：基本方針については教育委員会で協議を重ねたが、今回初めて現場の声を頂戴し、家庭環境が影響しているということも伺った。確かに家庭環境の影響は大きいと思うが、親の環境がどうであれ、子どもとの信頼関係が築けていれば、自尊心が芽生え、相手を大事にする心も生まれる。保護者同士のコミュニケーションの希薄化や価値観の多様化が子ども同士の関係に影響しているということはどうするか。コミュニティとして踏み込んだ取組が必要であるが、学校に任せるのではなく市としての対応も必要である。

吉川課長：学校だけではいじめ対応はできないため、家庭との連携が一番大切であるが、連携を密にするのは現状として難しく、学校からのアプローチに対して気持ちの共有ができない家庭もある。しかし、どんな場合でも、家庭との連携や啓発はかせない。

浦林委員：レイノルズ委員がおっしゃったのは、学校でというよりは社会全体で、保護者になるという啓発を市として取り組むべきではというご意見であると思う。

小紫市長：それについては基本方針の中にも少し書かれている。7ページ「2-6

地域社会・家庭との連携」にあるように、地域・家庭との連携を強化することで、いじめになる前に親などが話を聞いて解決するのが良い。生涯学習課や男女共同参画プラザ、こども課にも子育て・親子のコミュニケーションへのアプローチはあるが、具体的にどのようなことをしていけばトラブルの未然防止につながるのか、もう少し踏み込んだ形にしたいと思っているので、具体的な内容があればご提案いただきたい。

中田教育長：いじめの被害者に目が行きがちであるが、加害者の家庭環境を見てみると、貧困などの背景がある。学校はアンテナを高くしており、子どもとのコミュニケーションから家庭の状況が見えてくるが、家庭教育に学校教育が入り込むのは難しい。行政が入るには何らかの仕組みがいる。地域の子育て、生活の相談業務が必要という課題意識はある。条例上は市民自治協議会の設立であり、壺分小学校区では既に設立されている。学校とは別に相談できる体制を作る中で、いじめを未然防止できるのではないかと考える。

レイノルズ委員：取組をされていることを嬉しく思う。他の地域でも高めてもらいたい。

浦林委員：現場の先生方のメンタルや勤務時間などで困っていることについて、サポートできるものはないか。

永島校長：学校では、何か問題事象があれば常に相談する窓口がある。内容によってすぐに招集をかける場合は、関係者に声掛けし即座に招集する。特に、土日を挟む金曜日は要注意で声掛けをしている。また、学級で抱える様々な問題が負担になっているため、先生がいつでも校長や教頭に相談できる環境を作っている。

あすか野小学校の勤務時間は比較的短く、平均して午前7時過ぎから午後7時くらいまでである。他の小学校で午後7時くらいに帰っているのは2校ほどで、他は午後8時や9時くらいになる学校もある。先生に疲れがあっては話にならないので、管理職から声掛けし、何かあれば話を聞くということをしている。

阪本校長：学年で生徒指導部長に対応してもらっている。事象は管理職が報告を受ける。重大事象についてはすぐに対応し、家庭訪問をする場合もある。中学校は部活動もあるので、9月から3月までは5時半下校、それ以外は6時下校である。日頃からメンタルなど無理がないよう話している。中学校は教科担任制であるので、担任以外にも各教科で相談しやすい教諭に相談があり、クラブの顧問にも相談がある。遅くまで対応している教師もいる。

小紫市長：基本方針は、生駒市の現状・課題と、それに対する取組を記述してはじめて生駒市独自の方針となる。例えば、親同士や地域がコミュニケーションをとれる場づくりなどが課題としてあるか。また、現場が具体的に動きやすい中身になっているか。いじめが起こる前から相談の機会を設

けるなど、具体的な記述がほしいと感じたが、各校の方針に具体的な内容が記載されていると聞いて、その点は安心した。先生の個性によって差が出てくることもあるかと思うので、定期的の方針を周知する機会があればよいのではないか。

上田委員：大綱には、21世紀を生き抜く力の必要性が記載されている。違った意見を取り入れながらのコミュニケーションを授業の中で体験し、違った意見の子どもと議論するのが楽しいと感じることがいじめ防止につながる。

小紫市長：そのような方向性もあっても良いかと思う。多様性を議論して認め合う教育はいじめ防止にもつながる。授業時間が限られる中で恐縮だが、それも検討していただきたい。多様化を逆手にとって、みんなで考えればよいのではないか。

寺田委員：生駒市独自の現状分析と課題を示すとのご意見があった。学校の教育課程を作るに当たっても、子どもの実態を調べ、課題から狙いを見つけるのが本来のやり方である。しかし、最近では課題に地域性がなくなっている。塾通いやコミュニケーション力不足という実態はどの自治体も同じであるので、それをあえて記述するかどうかは議論する必要がある。

小紫市長：ご指摘のとおり、貧困や塾通いなどは全国的な課題という部分もある。SNSの問題など、学校でも苦勞しているところを重点課題として整理して、この基本方針を受けて学校の方針につながるように、もう少し突っ込んで書けないか。

飯島委員：県や国の方針と同じようなレベルでは独自性が表現できないのはそのとおりであるが、寺田委員のご意見のように問題の現状はどの地域でも似通っていて、生駒市特有の問題を記述するのは難しい。個性を盛り込むなら、生駒市がどこに重点を置いてどのように取り組むかという点で独自性を出せばよいのではないか。

小紫市長：生駒市の基本方針に市の現状を入れないのはどうかと思ったので意見を出した。SNSや地域のコミュニケーションなどをさらに踏み込んだ記述にして、具体的な予算や取組につなげられれば良い。

せっかくアンケート調査をして議論していただいたので、現状を分析して取組の方向性を方針にも書くべきかと思う。

ここでの意見を踏まえて、また教育委員会で議論していただきたい。

## (2) 生駒市教育大綱アクションプラン（平成29年度）改訂に向けた教育委員からの事業提案と教育委員会での協議結果について

- ・生駒市教育大綱アクションプラン（平成29年度）改訂に向けた教育委員からの事業提案と教育委員会での協議結果について、教育総務課辻中課長から説明【資料5】【参

### 考資料3】

(質疑)

#### ①イクメンサロン設置事業

小紫市長：父親の育児参加に留まらず、地域コミュニティへの参加もぜひ考えたい。  
みっきランドに土日は父親も来る。セミナーのような形式ばったものだけでなく、自然と父親が参加するような場づくりも合わせて検討してほしい。

#### ②こども園（幼保再編）推進事業

小紫市長：新教育委員会制度で取り組むものの一つである。ハード面だけでなく、教育大綱の目玉である「遊びを学びに」というプログラム（ソフト面）も協議していただいていると聞いている。

#### ③小中一貫教育・義務教育学校設置検討事業

小紫市長：小中一貫校のメリットについては検証が必要と考えている。

#### ④生駒市教育力活性化プロジェクト

小紫市長：障がいを持つ子の教育にもつながる。場所や設備については検討が必要だが、データベース化も現場で有効かどうか考える必要がある。また、教科ごとの研修は、IT・語学・障がい者教育・いじめなどにも踏み込んでほしい。

#### ⑤ミュージアムで学ぼう！博物館類似施設活用推進事業

小紫市長：いこまのルーツプロジェクトでバス代を負担しているが、ふるさとミュージアムの見学だけではもったいない。例えば高山竹林園で抹茶体験をするなど、様々なテーマや場所を考えるよう事務局に伝えている。

#### ⑥赤ちゃんから学ぶ「先生は赤ちゃん」

小紫市長：兄弟がいない児童生徒もいる。光明中の命の学習プログラムのように、単なる啓発でなくリアルを学ぶ学習も必要であると思う。しかし、赤ちゃんの安全性やリスク面が問題である。実際にやっている現場での留意点などを検討していく必要がある。

寺田委員：人形を抱いたりすることは幼稚園でもできるが、生きた赤ちゃんでするのは安全面を考えると厳しい。

小紫市長：赤ちゃんの温かみや弱々しさの経験は人形ではできないところである。そのような課題がクリアできれば実施に向けて検討していただきたいと思う。

⑦今後の英語教育のあり方について

小紫市長：この方向性で進めてもらうよう話している。国の動きも踏まえて進めてほしい。AIの英語翻訳機能が進んでいる。

レイノルズ委員：その必要性からの認識が必要である。

小紫市長：AIには通訳のようなニュアンスの表現ができないなどの課題もある。子ども達が大人になるころには、ドラえものの翻訳こんにやくのような技術も進歩しているかもしれないが、そのような話も子どもが興味を持つきっかけになればよい。

⑧21世紀を生き抜く力の一つ「問題発見力」の育成

小紫市長：コマーシャルを作って動画を流すなど、様々な方法での取組が可能であると思う。スーパーの店長の話聞くなど、IT・英語・現場力などいろいろ関係するが、提案をいただきたい。

検討してほしいのが、家の近くにいるすごい人の話を聞いたり学校に呼んだりする事業である。次のアクションにつなげていくことがプラスになるのではと思う。

⑨「他者と協働するコミュニケーション力」を養うファシリテーションを学ぶ

小紫市長：教師も子どもも一緒に学ぶのか。

レイノルズ委員：子どもが把握できても大人ができていないと意味がない。既に力を持っている人もブラッシュアップの意味で参加してほしい。双方からのアプローチが必要である。

小紫市長：どのようにプラスになるかを議論していただき、学校にも浸透させてほしい。アクティブラーニングの柱にもなる。

レイノルズ委員：別の授業を設定しなければというのではなく、既存の科目に取り入れることができるので取り組みやすいかと思う。

小紫市長：具体的なイメージの検討が必要である。

⑩チャレンジ！やさしくたくましいこまっ子キャンプ

浦林委員：キャンプなので楽しく参加できるようにお願いします。

⑪生駒こどもチャレンジ補助事業

小紫市長：ビブリオバトルで、本が好きな子に読書という切り口で光が当たることの意味を感じた。多様なところに光が当たればよい。授業以外の場でもチャレンジを援助する仕組みがあればよい。予算化する上で、もう少し具体的に検討してほしい。

⑫ふるさと生駒図書選定事業、生駒ふるさとミュージアム・図書館連携事業

小紫市長：市の中でも関連した議論をしており、昭和の写真や文書を集めて公開できないかということを広報広聴課でも検討している。図書館まちづくりワークショップにおいて、地域の図書館でしかできない文書を集めたり、納本条例の話題も上がった。まちづくりと連携した図書館でないといけない。図書館の郷土資料のコーナーの充実が地域愛・郷土愛・まちづくりにつながれば面白い。

### ⑬生駒市茶道体験事業

小紫市長：検定はハードルが高いが、公式な検定かふわっとした検定かで違うと思う。茶道は生駒市が持つ大きなコンテンツである。学校で茶道を体験することに加えて、何か子ども達にメリットになるものがあればよい。図書館まちづくりワークショップでは、駅前図書室で茶道をやってはどうかという意見もあった。また、小学校の卒業生が感謝の気持ちを込めて親に抹茶を点てるという事業もあり、それも良い。

小紫市長：どこまで落とし込むかということまで考えていただいて感謝する。さらに具体的に検討していただければ、生駒市の教育の成果が見えてくる部分もある。さらに議論していただきたい。

(3) その他  
なし

○閉会宣告

午後0時20分 閉会